


特集 〈耳〉

み み

田村 久美子

耳というتماず思ひ浮かぶのは♯の印のこと、日本では「へ音記号」という。ト音記号というのは、この印で、小学校の音楽の時間に教えられてくるぐると書きはじめて、親しんでいる人が多いと思う。♮こちらの記号は楽器によって使う人もあるが、あまり親しみはないかもしれない。ピアノを弾く人は左手の記号という感じで親

しんでいるだろう。この記号を私は子どもたちに教える時「おみみのかたち」「おみみの記号」ということにしている。そんなことをしているうちに私自身もこの記号を書く時はこの記号で表される音域の音が聞こえるようになっていた。ある時、当時北海道の大学に通っていた息子が電話をかけてきた。「もしもし、あのね、みみだ

けどさ、あれ、下から二番目がドだね。だから次の線はレでいいんだよね、それが変なんだ、合わないんだ」。

彼は合奏しているらしい。色々な楽器を使う時、記号を使うことがある。彼はこの記号をうっかり読みちがえていたのだ。「あ、わかった。ガチャン！」。私はしばらく笑いがとまらなかつた。なかなか電話などかけてこない彼が「もしもしみみだけど」なのである。

それからずっと私は「このかたちおみみに似てるでしょ」とピアノのレッスンのとき子どもたちに聞く、「うーん」という可愛い答がかえってくるたびに、あの電話がよみがえってくる。楽譜の途中でこの記号がでてきたりすると「ほらおみみになるのよ」「おみみのところを気をつけてね」と毎日のように言っている。

みみということばは音が美しい、ドミソという

基本的な和音の中心にいて、和音のひびきを柔らかくしているミの音という感覚が私の中にはあるが、みみと発音するとたのしいなつかしい気分になる。それは昔話『ききみみずきん』（岩波書店）を思うかららしい。「木下順二 文・初山滋絵」で美しい絵本がある。初山滋の絵が印象的で、ずきんをかぶると小鳥の声からお話が聞こえるというなんともたのしいお話だ。幼い頃この話を知ってから、私はこのずきんをいつでも持っている気になつている。庭先で遊んでいるスズメはなかよくしたりにぎやかにおしゃべりしているし、木の上ではめじろのつがいがよりそって小声で話しているのに、かけすが、大声でおどかしたりしている。鳥ばかりではない。我が家の小さな水槽の中のカメもメダカも、なかなかにぎやかに話している。

スリランカに行った時のことである。夜明け前

のまだ暗い空から、カンカラカーン、カンカラカーンと歌いはじめる鳥がいて、それに応えて、グググおはようという声がある。そのうち、キーキー、シヤツ、シヤツと鳥たちが朝のあいさつを始める。その華やかなびぎきにこちらも大歓声をあげた。すばらしい交響曲であった。そのすばらしい音楽会が始まるのが楽しみで夜は眠れないということになったものだ。

現在、独立しているあの「みみだけど」の電話の息子が、私のことを「少しベートーヴェンになつていないかな」と言う。電話に出るのがおそいとかレイゾウコが鳴っているよとか言う。そうかしら……と思う。私の年齢の頃の母を思い返すと、そう、あやしいかもしれない。ベートーヴェンは聞こえない耳で指揮をしたと伝説になつている。彼には自分の曲がしっかり聴こえていたのだと想つて私は胸が熱くなる。

いつか私の耳に現実の音が遠いものになつたら、そうしたら、いつでも私の聞きたいと思つてメロディーやハーモニーが聞こえてくるだろうと思ひめぐらす。私の弾くピアノの音も、きっと私の憧れるすてきな音で思いどおりの演奏で聞こえるのだろう。

(ピアノ教師)

